令和五年度一般選抜（Ⅰ期）問題　国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

一　解答は別紙答案用紙に書くこと。

二　解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

問題用紙五枚

答案用紙一枚

無断転載・複製を禁ず

令和五年度一般選抜（Ⅰ期）問題　国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

一　解答は別紙答案用紙に書くこと。

二　解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

芭蕉に「ものいへば唇さむし秋の風」という有名な句がある。私はこの句を好まない。この句が彼の『座右銘』という短文に「人の短をいふ事なかれ、おのれが（　①　）をとくことなかれ」とある後につけられたものであることや、一方これは彼が門下の才物、其角〔宝井其角、蕉門の十哲の一人。一六六一―一七〇七〕に与えて戒めとした句だという説のあることなどは、実は近ごろ知った。そしていよいよ嫌いになったのだが、そうした道学的な前書きや（1）来歴を別にしても、単独に一句として見ても、私はこの句に初めて接した昔から反感をもっていた。それは、私がものをいうことが相当以上に好きであるという生れつきによるのだろうが、そればかりではない。

うるさい人の世を多少とも渡ってきた人間には、この句の真実性を身にしみて感じ、思わず「ものいへば唇さむし秋の風」と呟きたくなる瞬間も稀れではないだろう。人間の真実性を現わしているという点において、この句は文学的に一応の成功を収めているといえよう。しかしその真実性が大らかな広い、正しい人間性に根ざしているか、どうか。またそれが、一つの格言のようになって（2）人口に膾炙していることは、社会的に健全な現象であるか、どうか。一体、この句を呟きたくなるときの気持はどんなものだろう。「ああ、言わずもがなのことを口にした、恐らく私の真意はわからなかったろう、いや誤解されたかもしれぬ。口は禍いのもと、おれも馬鹿だった、それにしても人の世は寒々とつれないものだ」。そこには後悔と自嘲とがある。ところでこの二つは、健全な人間にとっては最も憎むべきものであるはずだ。人間は常に失敗をさけられない。そして反省がなくてはなるまい。しかし後悔は別である。（　A　）しているとは停滞していることである。（　B　）を踏切りにして前へ進んで、その失敗をつぐない改めるのが、自己にも他人にも忠実であるにちがいない。また（　C　）は一そう排けらるべきである。自嘲は真の自己否定ではなく、あくまで自己に閉じこもりつつひがむことである。真の自己否定は新しい転機ともなり得るものだが、これには勇気がいる。ところが自嘲、ひがみは卑屈な生命の否定で、そこからは何も生れない……。（　D　）、私はこの句を思い出すごとに、芭蕉の一部にある小ささ、というよりむしろ彼をしてかかる句を（a）ハかしめた時代の矮小さを感じる。そして思う、（3）こんな句の真実性がぴったりわかるような人間がだんだん稀れになってゆくのでなければ、日本の社会がよくなったとは言えぬのだろうと。

動物はものをいわない。人間だけがものをいう。この（b）天賦の機能を正しく用い、またこれを楽しまぬというのは間違いである。日本で従来、ものを余りいわぬことを偉人になくてはならぬ性質のように考えたのは間違いである。平常ものをいわぬ人が、たまたま口を開いたので、何をいうかと（　②　）をかたむけると、馬鹿げきったことを鹿爪らしくしゃべっただけだった、そういう経験を私はいやというほどもっている。私は（c）チンモクの偉人などというものを信用しないことにしている。不言実行という言葉もあるが、それが不言不実行にすりかえられていることが多いのであって、私は不言実行などという人より一言半行、いったことのせめて半分は必ず実行する人の方を重んじる。ものをいえば必ず社会的に何らかの責任を生じる。不言実行などというのは社会的に責任をとるまいとすることであって、政治的には封建制とつながることはいうまでもない。われわれは今後、大いにものをいうようにしなければならない。

がんらい日本語には、「黙れ」「やかましい」「もういい」「わかった」「うるさい」等々、人の発言を（d）フウじる言葉がむやみに多い（たとえば（4）『暗夜行路』をみよ）。西洋語には、少なくとも私のよく知っているフランス語には甚だ少ない。（　E　）「テゼ・ヴ」（お黙り）というような言葉を用いることは、一種の人権蹂躙と考えられている。このことは言語発表ということについて、日本がまだ極めて封建的だということを示している。

無断転載・複製を禁ず

しかし、ものをいうことを遠慮するなといっても、それは人に通じないようなことを、勝手気ままに喋り散らしてよいということでは、もちろんない。自分の思うことを率直に、しかし筋道をたてて他人にわかるように発言することが必要なのである。そうすることは他人に対する社会的義務である。

気のきいた言い方をせよ、というのでは決してない。自分にはっきりわかっていることを自信をもって明瞭にいうことが第一である。（　F　）、地位の上の人に対しては尊敬をもって話さねばならない。デモクラシーといっても、社会には常に秩序がなくてはならぬからである。しかしそのために自分の（e）所信をまげたり、卑屈になったりしては絶対にいけない。つまり話す態度には尊敬があっても、話されることについてはあくまで平等の立場でありたい。あるフランスの昔の文学者が、王侯の前に膝を屈するが心は屈しないといった、その気持が大切である。従って大切なのは、地位の上の人々が、部下のまたは年少の者の話をきくときに、あくまで相手を喋らせ、しかもその至らぬところ、誤っているところは、おだやかに人間的に訂正してやるだけの雅量をもつことである。そうすれば、部下のものは進んで話すようになり、従ってよい意見も出てき、部内の空気は必ず明朗になり、仕事は進むにちがいない。ものいえば唇さむしの感を決して抱かせぬようにせねばならない。これができぬような人間はデモクラシーの時代に、人の上に立つ資格はないのである。

（桑原武夫『第二芸術』――ものいいについて――　一部改変）

問一　傍線部（a）～（e）の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

a　ハ（か）　b　天賦　c　チンモク　d　フウ（じる）　e　所信

問二　空欄（①）、（②）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1　美　2　耳　3　節　4　首　5　頭　6　長

問三　傍線部（1）「来歴」とあるが、その指し示している内容を十五字以内で示せ。

問四　傍線部（2）「人口に膾炙する」の意味を十五字以内で簡潔に述べよ。

問五　空欄（A）、（B）、（C）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1　勇気　2　否定　3　自嘲　4　失敗　5　後悔　6　反省

問六　空欄（D）、（E）、（F）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1　もちろん　2　ともかく　3　ところで　4　しかも　5　まるで　6　そして

問七　傍線部（3）「こんな句の真実性がぴったりわかるような人間がだんだん稀れになってゆくのでなければ、日本の社会がよくなったとは言えぬのだろう」に関して、次の文中の空欄Ⅰ、Ⅱに適するように、問題文中の言葉を用いてそれぞれ二十五字以上三十字以内で記せ。（句読点も字数に含む）

「こんな句の真実性がぴったりわかるような人間がだんだん稀れになってゆく」とは、人々が（　Ⅰ　）ということで、それによって日本の社会が（　Ⅱ　）に変わるので、よくなったと言えるのだろうということ。

問八　傍線部（4）『暗夜行路』の作者は次の中の誰か。番号で答えよ。

1　川端康成　2　夏目漱石　3　芥川龍之介　4　志賀直哉　5　正岡子規

問九　問題文から次の一文が脱落している。挿入すべき元の箇所の前の五文字（句読点を含まない）を抜き出せ。

そのためには各人が、ものいいが上手になるように努力しなければならない。

無断転載・複製を禁ず

問十　問題文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選んで記号で答えよ。

ア　芭蕉に「ものいへば唇さむし秋の風」という有名な句がある。私はこの句を好まない。単独に一句として見ても、私はこの句に初めて接した昔から反感をもっていた。それは、私がものをいうことが相当以上に好きであるという生れつきによるのだろうが、そればかりではない。

イ　ものをいうことを遠慮するなといっても、それは人に通じないようなことを、勝手気ままに喋り散らしてよいということでは、もちろんない。自分の思うことを率直に、筋道をたてて他人にわかるように発言することが必要なのである。そうすることは他人に対する社会的義務である。

ウ　日本で従来、ものを余りいわぬことを偉人になくてはならない性質のように考えたのは間違いである。不言実行という言葉もあるが、それが有言不実行にすりかえられていることが多いのであって、私は不言実行などという人より、いわなかったことのせめて半分は必ず実行する人の方を重んじる。

エ　この句の真実性を身にしみて感じ、思わず「ものいへば唇さむし秋の風」と呟きたくなる瞬間も稀れではないだろう。人間の真実性をあらわしているという点において、この句は文学的に一応の成功を収めている。だからこそ、その真実性は大らかな広い、正しい人間性に根ざしていなければならない。

オ　人はものいいが上手になるように努力しなければならない。自分にはっきりわかっていることを自信をもって明瞭にいうことが第一である。地位の上の人々が、部下の話をきくときに、あくまで相手に喋らせる、そうすれば、部下は進んで話すようになり、よい意見も出てくる。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

（1）言葉は二字目に、異変がある。ドラマがある。

五年前から、毎週火曜日の朝八時、ＴＢＳのラジオ番組に出ている。森本毅郎さん、遠藤泰子さんが司会。ぼくはお二人を前に、言葉や本の話をする。

（　Ａ　）その日、詩人ゲーテの名前が、話のすみっこに入っている、とする。森本さんは（a）シンシ的な表情のまま、予定にないことを放送中に突然ぼくに質問したりすることがある。（　Ｂ　）今日はそこまではつつかれまいとは思いつつも、ゲーテの生年や（b）チョサクの正しい発音を確認しておこうという気持ちにぼくはなる。

（　Ｃ　）心配がなくても、直前になると自分からそういうものをさがしだしてしまうぼくの性格にはあきれるが、ほぼ全国に届くナマ放送だから、まちがったことはいえない。そう考えると、さほど悪くはないこころがけである。

ゲーテを辞書でさがす。時間がない。放送一分前だ。ラジオ局の書棚にある辞書や百科事典で、ゲーテを引く。（2）「早く出てこい、ゲーテ」。出てこない。ゲーテがいる場所は、本によって、ちがうからである。

国語辞書では「ー」（長音符）のところは、アイウエオいずれかの母音とみなされる。ゲーテは、（　Ｄ　）に。だから「けいそつ」「けうとい」あたりの次に「ゲーテ」が登場。ところが百科事典では長音を無視するのがならわし。配列上は「（　Ｅ　）」となり、「ケッセル」「ケッペン」のあとあたりに「（　Ｆ　）」と出てくる。

国語辞書は、あくまで日本語の発音が基準。長音符を母音にしてしまうのもそのため。百科事典はそうではない。だからこうして二通りの配列が生まれるらしいのだが、（c）シャクゼンとしないところもある。

他の辞典もためしに見ておこう。和英辞典は、和語から外国語を見るので辞書型が多いが三省堂「ジェム」のように百科型もある。外来語辞典は辞書型が多い。文庫の「目録」の巻末索引の序列はどうか。岩波、文春、集英社、ちくま、河出、現代教養は辞書型。新潮、講談社、中公、角川、朝日、ハヤカワは百科型。ややこしい。地図の索引は百科型。エーゲ海は、エゲ海とみなされ、（　Ｇ　）のあとになる。カタカナばかりなのでそのほうが見やすい。

電話帳はどうか。

カタカナ語は辞書型だが漢字の配列は変則。たとえば「安」には「あ」という一音の読みがある。それが優先するので、安藤

無断転載・複製を禁ず

さんたちは「あんどう」と、二字目が「ん」なのに、二字目が「お」の青木さんたちの前に、出ることに。電話帳や人名録で名前の出が遅くて（d）オウジョウすることがある。たとえば国語辞書では、森鷗外、森蘭丸は「森」という親見出しのもとに集まる。「――」という記号で、ぞろぞろつながって出る。ところが森戸辰男、護良親王などは一般的な姓ではないので、たいていは独立した項目になる。同じ「もり」でもずいぶん離れてしまうのだ。人名を国語辞書で引くときは、一般的な姓か、そうでないかをとっさにかぎわけないといけない。でも人名事典になると、辞書型が主流。完全なアイウエオ順で並ぶ。

言葉を調べたいときは、人間はあわてているものである。日曜日に辞書を引く人より、月曜日に引く人のほうが多いはずである。あわてているときに「ええと……この言葉はこの辞書ならこのあたり、この事典ならここ」と、いちいちルールを思い出してもいられない。手にとるものをまちがうと、やっかい。たとえば「サーロイン」という言葉は、広辞苑第四版では九九二頁にある。かりに広辞苑が百科型の配列だったら一〇五八頁におめみえするはず。なんと六六頁分のひらきが出る。国語辞書は、人名、地名などは別個に（e）イッカツして掲載するといいのではと思うがどうだろう。

というわけで、ゲーテにしても、サーロインにしても、つまり言葉は、（　H　）にピークがある。そこでぱっと分かれて、ひろがる。言葉は飛び立ち、飛び散る。（　3　）ように。そこからがドラマなのだ。あらためて言葉の世界を見た思いになる。ガガーリン、ランボー、ニューヨークのように、長音符が三字目以降だと、似た言葉が少なくなるので、迷いもなくなる。辞書でも事典でも、見当どおりの場所に言葉が出てくる。三字を過ぎたら、なんの問題もないのである。

ぼくが子供のときだった。祖母は「ファミリー」という発音ができない。それで「ファーミリ・ランド」になってしまう。「ファミリー・ランド」だよと何度言っても直らなかった。でもそれはどちらにしても、三字目以降だから問題はないのである。（4）その遊園地「ファーミリ・ランド」へ、祖母とぼくは手をつないで出かけた。

（荒川洋治『夜のある町で』による）

問一　傍線部（a）～（e）のカタカナを漢字にせよ。

a　シンシ　b　チョサク　c　シャクゼン　d　オウジョウ　e　イッカツ

問二　空欄（　A　）～（　C　）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1　なんと　2　まさか　3　それに　4　たとえば　5　さほど

問三　空欄（　D　）～（　F　）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1　ゲエテ　2　ゲッテ　3　ゲテ　4　ゲーテ　5　ゲテー

問四　空欄（　G　）に、索引の配列として最も適するものを、次の中から選んで番号で答えよ。

1　エゴイスト　2　エチオピア　3　エストニア　4　エジソン　5　エクアドル

問五　空欄（　H　）に最も適する漢字三文字の言葉を問題文中から探して答えよ。

問六　問題文から次の一文が脱落している。挿入すべき元の箇所の前の五文字（句読点を含まない）を抜き出せ。

ゲーテには「二種類」あることになる。

問七　傍線部（1）「言葉は二字目に、異変がある。ドラマがある。」と述べているが、それはどのようなことなのだろうか。「異変がある。ドラマがある。」を五十字以上六十字以内で簡潔に説明せよ。（句読点も字数に含む）

問八　傍線部（2）「早く出てこい、ゲーテ」とあるが、その心境を説明する六文字の言葉を問題文中から探して答えよ。

無断転載・複製を禁ず

問九　空欄（3）に入る最も適当と思われるものはどれか。次の中から選んで記号で答えよ。

ア　尻馬に乗った
イ　張り子の虎を見た
ウ　立つ鳥跡を濁さない
エ　蜂の巣をつついた
オ　取り付く島もない

問十　傍線部（4）「その遊園地『ファーミリ・ランド』へ、祖母とぼくは手をつないで出かけた。」とあるが、「ファーミリ・ランド」へ祖母と手をつないで出かけた「ぼく」の心情を説明した次の中で、最も適当と思われるものはどれか、記号で答えよ。

ア　祖母は「ファミリー」という発音ができないので、ぼくが「ファミリー・ランド」だよと何度言っても直らなかった。でもそれはどちらにしても、三字目以降だから問題はない。子供のぼくはその遊園地「ファーミリ・ランド」へ、何思うこともなく、祖母の手を取って出かけた。

イ　祖母は「ファミリー」という発音ができないので、「ファミリー・ランド」が「ファーミリ・ランド」になってしまう。何度教えても祖母は直らないので、子供のぼくはあきらめの気持ちで気が進まないまま、「ファーミリ・ランド」へ祖母と手をつないで出かけた。

ウ　祖母は「ファミリー」という発音ができないので、「ファミリー・ランド」が「ファーミリ・ランド」になってしまう。子供のぼくには違和感があり、根気強く直そうとしたが無駄な努力であった。今から思えば、三字目以降だから問題はなく、祖母と出かけて良かったと思う。

エ　お年寄りが「ファミリー」という発音ができず、「ファミリー・ランド」が「ファーミリ・ランド」になってしまうことはおそらくよくあることだろう。子供のぼくは、「ファミリー・ランド」が「ファーミリ・ランド」になろうとも、遊園地に行ける喜びで、祖母と手をつないで出かけた。

オ　お年寄りが「ファミリー」という発音ができず、「ファミリー・ランド」が「ファーミリ・ランド」になってしまうことはおそらくよくあることだろう。三字目以降だから問題はないのであるが、「ファミリー・ランド」と正しく発音してほしいと思いながら、ぼくは祖母の手を取って出かけた。

無断転載・複製を禁ず